

堀田国元 著

『ディスカバー 岡見京』

岡見京(1859-1941 安政6-昭和16)は公許女医第5号である。公許女医4号までの荻野吟子、生澤クノ、高橋瑞子、本多センについては、女性蔑視の風潮の中、困難な環境の中で、医学を志し医術開業試験に合格した経緯は多く語り継がれているが、公許女医5号の岡見京については、三崎裕子「明治女医の基礎資料」と『日本女医史追補』などにペンシルバニア女子医学校卒と見るのみで、その生涯、生き様などについては、これまで全く知られていなかった。そのような中、著者の堀田国元氏が岡見京の生涯について詳しい記録を書かれた。

京はペンシルバニア女子医科大学(世界最初の女医・エリザベス・ブラックウェルの出身校)に入学し、4年後に卒業し、日本の医師登録を申請した。内海忠勝内大臣男爵は1901(明治34)年、米国ペンシルバニア婦人医科大学より受領した医全科卒業の証書を諦認し医術開業免許を交付した(第三九二七号医籍登録)。当時、医師免許は日本の医術開業試験合格者の他、外国の医学教育機関の卒業者に対しては無試験で与えられた。

京は岡見千吉郎と結婚後26歳にして留学し4年間の勉学の結果、アメリカの医師免許を得て日本に帰国したのであった。高木兼寛は京に慈恵会病院の婦人科主任の席を用意した。京の元で、成医会出身の公許女医4号の本多センが働いた。

京が留学できたのは、京の生家・西田家と婚家である岡見家の財政がそれを許した事と両家の女子教育に対する理解があったことがある。当時、済生学舎の学生であった18歳の鷺山(吉岡)弥生は京を訪ね、その時の印象を「憧れの人を見てため息の出るような、一生忘れ難い感動的なもの

でした」と記しているいう。

京は南部藩の西田家出身で、京と結婚した千吉郎は中津藩の江戸家老・岡見家の末裔である。南部藩ということで新渡戸稲造、札幌農学校を経て北海道大学へ。中津藩からは福沢諭吉、北里柴三郎、慶応大学へとその交流の波紋は現在に向かって広がる。津田ウメを始め、日本からの留学生の多くが、お世話になったペンシルバニアのモリス家もその輪に加わり、交流は国境を越えて拡大していく。また、岡見家は日本の女子教育の草分け的存在である頌栄女学校の創立者でもある。

岡見家の末裔である岡見吉郎氏は北海道大学農学部農芸化学科卒業後、国立予防衛生研究所に奉職されカナマイシン、ブレオマイシンの発見など多数の新抗生物質発見/発明に貢献され、1963年には(財)微生物化学研究所を創設された。本の著書である堀田国元氏は岡見吉郎氏の弟子である。

堀田氏はご自分の師弟関係、交友関係から糸をたぐり、京と日本の近代思想の中心を形作る多分野の人々との華麗な繋がりを一枚の壮大なパノラマに示された。読み進むにつれて日本の近代化に貢献した人々の人生に思い致すところがあり、感動を覚えた。日本医史学会の会員諸氏にも深い感銘を与える書と考える。ここまで多くの資料を丹念に収集され、それを、しっかりとまとめられた堀田氏に敬意を表する。

(小田 泰子)

[自費出版、2016年4月、発行者：堀田国元(一般財団法人 機能水研究振興財団)]